

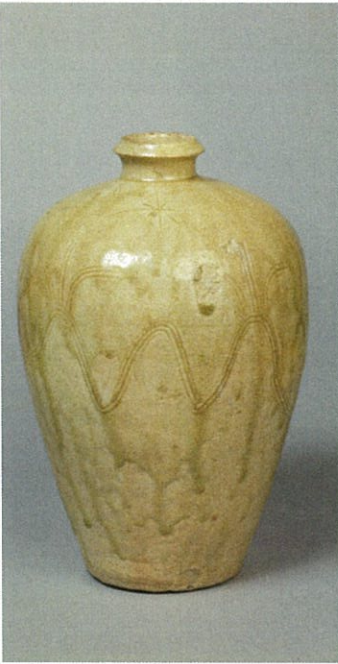
平成22年度購入文化財一覧

【奈良国立博物館】(計7件)

| | | |
|--|--|---|
| <p>1</p> <p>○種別 ○名称 ○員数 ○時代 ○品質 ○寸法等</p> <p>○作品概要</p> <p>○購入金額</p> | <p><絵画> 絹本着色春日地藏曼荼羅 (けんぼんちゃくしよく かすがじぞうまんだら)</p> <p>一幅 鎌倉時代 14世紀 絹本着色 掛幅装 縦115.3cm 横39.1cm</p> <p>本品は、画面上部に御蓋山および春日山、下縁に春日野を表すとみられる樹木や雌雄の神鹿を配し、向かって左上から春日三宮の本地仏である地藏菩薩が涌雲に乗って飛来し、地獄から衆生を救済するために来迎する姿を描いている。また、地藏菩薩の右下には烏帽子直衣姿で座る人物が描かれるが暗色の顔料で塗りつぶされ、その上から頭光の光芒を表す截金線が置かれる。地藏の端正な顔立ちは鎌倉後期の作例に描かれるものにきわめて近似するとともに、着衣に施される精緻な截金文様や金泥の彫塗りによって金属製の荘厳具を表す点にも、鎌倉後期仏画の技法的特色が顕著にみられる。現在知られる春日地藏曼荼羅のなかでも最古の作例と見ることができる。</p> <p>16,800,000円</p> |  |
| <p>2</p> <p>○種別 ○名称 ○員数 ○時代 ○品質 ○寸法等</p> <p>○作品概要</p> <p>○購入金額</p> | <p><絵画> 絹本着色千手観音影向図 (けんぼんちゃくしよくせんじゅかんのんようごうず)</p> <p>一幅 鎌倉時代 13世紀 絹本着色 掛幅装 縦111.9cm 横54.7cm</p> <p>本品は、補陀落山中の千手観音と千手観音に帰依する人物の対面を描いたものである。画面向かって左にやや下を向く十一面多臂の千手観音が斜め向きに立ち、その先には截金線で縁取られた円相があり、なかには烏帽子に白い装束を身につけた人物が千手観音を拝する様子が描かれる。千手観音の造形や表現技法および俗体の貴人を描く似絵表現から、13世紀中頃の制作とみられる。なお、画面右上に四行ほどの墨書が残り、その最終行に禅僧が署名で多用する「叟」の字が確認できることから、禅僧による着賛と思われる。補陀落山に立つ千手観音と俗体の貴人が対面するという他例をみない図像の絵画として、日本仏教絵画史上貴重な存在である。</p> <p>8,400,000円</p> |  |

| | | |
|--|---|---|
| <p>3</p> <p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等</p> <p>○作品概要</p> <p>○購入金額</p> | <p><彫刻> 木造僧形立像 (もくぞうそうぎょうりゅうぞう)</p> <p>一 軀</p> <p>鎌倉時代 13世紀</p> <p>ヒノキ材 一木割刳造か 内刳 彩色 截金 玉眼</p> <p>総高 54.5 cm 像高 28.9 cm 頂一顎 5.2 cm 面幅 3.3 cm 面奥 4.3 cm 耳張 4.1 cm 胸奥(左) 4.1 cm 胸奥(右) 4.2 cm 腹奥 4.9 cm 臂張 8.5 cm 袖先張 8.7 cm 裾張 6.2 cm 足先開(外) 5.0 cm 足先開(内) 2.3 cm 台座高 18.4 cm 台座框幅 21.8 cm 台座框奥行 17.1 cm 光背高 36.7 cm 光背幅 19.0 cm</p> <p>剃髪形で、腕前で合掌し左足先を少し前に踏み出して立つ像である。髪際は彫り表さず薄彩色で髪を描き、白毫を嵌める。耳朶は紐状で貫通する。着衣は両肩を覆う衣の上に左肩から袈裟をかけ、裙をはく。なお台座は七重蓮華座で、光背は周縁に雲唐草をめぐらせる二重円相光である。写実性に富んだ表情や着衣の襞の彫法および精緻な文様などから、鎌倉時代とりわけ13世紀の制作と推定される。若干彩色の微細な部分が不明であるものの、截金文様まで確認しうる保存良好な作品である。現段階では、地藏菩薩像か、もしくは十大弟子ないし釈迦三尊の脇侍としての阿難像である可能性が考えられる。</p> <p>15,000,000 円</p> |  |
| <p>4</p> <p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等</p> <p>○作品概要</p> <p>○購入金額</p> | <p><書跡> 法華経(建治二年東大寺僧宗性発願経) (ほけきょう/けんじにねんとうだいじそうしょうほつがんきょう)</p> <p>八巻</p> <p>鎌倉時代 建治2年(1276)</p> <p>紙本墨書 卷子装</p> <p>(巻第一) 26.3×985.4 cm (巻第二) 26.3×1115.2 cm (巻第三) 26.3×1050.1 cm (巻第四) 26.4×916.1 cm (巻第五) 26.2×996.4 cm (巻第六) 26.4×962.1 cm (巻第七) 26.4×900.5 cm (巻第八) 26.4×807.7 cm</p> <p>本品は、表裏ともに雲母を引いた楮の打紙に銀泥で界線を引き、『法華経』8巻を墨書する。表紙は紺紙を用い銀泥で霞文を描き金截箔を、見返しは染色のない紙に金銀の截箔を散らして装飾する。各巻の巻末に写経の目的・経緯を記した奥書があり、鎌倉時代を代表する東大寺学僧の一人である宗性とその周辺の僧が稚児の力命丸を供養するために書写したことが知られる。巻第一は経文から奥書に至るまで宗性の自筆であるが、巻第二以降は周辺の僧が分担書写し奥書のみ宗性が執筆した(但し巻第八は宗性以外の僧が奥書の大半を記す)。書写の背景が判明する点において貴重な鎌倉時代写経であり、中世南都寺院社会の実態を知る上で注目に値する史料である。</p> <p>26,250,000 円</p> |  |

| | | |
|--|---|---|
| <p>5</p> <p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等</p> <p>○作品概要</p> | <p><漆工> 黒漆宝塔 (くろうるしほうとう)</p> <p>一基</p> <p>室町時代 16世紀</p> <p>木製 黒漆塗 金銅装</p> <p>総高 100.5 cm (礼盤含む) 宝塔総高 88.4 cm 礼盤一辺長 54.6 cm 基壇 47.9×47.3 cm (階段含む)</p> <p>本品は、文永7年(1270)に興正菩薩観尊によって造立された金銅宝塔(奈良・西大寺所蔵)を模したと推定される宝塔である。宝塔は天板四隅に猫脚を付けた形式の礼盤上に載る。基壇には四方に階段を設け、上面に高欄をめくらせている。相輪や宝鎖は金銅製であるが、それ以外は木製で布被せずに黒漆を塗り、基壇内部など外から見えない箇所は素地とする。多少の違いはあるものの、総高をはじめ細部表現、全体のプロポーションに至るまで西大寺の金銅宝塔を忠実に模している。なかでも西大寺愛染堂宝塔(木製漆箔)は本品と近似することから、本品は西大寺に伝来した可能性が高く、近世における西大寺の舍利信仰を考える上で貴重な作例である。</p> <p>○購入金額 15,750,000円</p> |  |
| <p>6</p> <p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等</p> <p>○作品概要</p> <p>○購入金額</p> | <p><考古> 三彩小壺〔筑前早良郡出土〕 附 ガラス小玉 (さんさいこつぼ・ちくぜんさわらぐんしゅつど/つけたりがらすこだま)</p> <p>1口 ガラス小玉は20点(破片含む)</p> <p>奈良時代 8世紀</p> <p>(三彩小壺) 陶製 施釉 (ガラス小玉) ガラス製</p> <p>(三彩小壺) 身: 器高 4.2 cm (残存値) 口径 3.7 cm (現状値) 最大径 6.3 cm 蓋: 器高 1.1 cm 直径 4.7 cm つまみ径 1.4 cm (ガラス小玉) 直径(最大) 0.7 cm 厚さ(最大) 0.2 cm 孔径(最大) 0.3 cm</p> <p>三彩小壺は身と蓋からなり、胴の中位に最大径をもちながら横方向に強く張り出しており、蓋は上面に僅かな甲盛をもち、扁平化した宝珠つまみが中央に取り付けられている。また、ガラス小玉はかなり扁平でドーナツ形を呈している。器表面に著しい剥離や口縁部の欠損があり、本来の奈良三彩の美しさが損なわれているものの、身・蓋かつ内容物(ガラス小玉)が附属するのは希有なことであり、考古資料的には大いに注目される。なお出土地とされる「筑前早良郡」(現福岡市西区周辺)は、古代の鴻臚館の西方で、姪浜から背振山地まで陸海の両方に通じ、同時代の官道や寺院、郡衙推定地が存在する北部九州の重要拠点である。</p> <p>○購入金額 7,875,000円</p> |  |

| | | | |
|---|--|---|---|
| 7 | <p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数</p> <p>○時 代</p> <p>○品 質</p> <p>○寸 法 等</p> <p>○作品概要</p> <p>○購入金額</p> | <p><考古></p> <p>瀬戸 灰釉櫛目文瓶子〔和歌山県新宮市丹鶴山出土〕 (せと かいゆうくしめもんへいじ/わかやまけんしんぐ うしたんかくざんしゅつど)</p> <p>1口</p> <p>鎌倉時代 13世紀後半</p> <p>陶製 施釉</p> <p>器高 27.9 cm 口径 4.5 cm 口縁最大径 5.5 cm 胴最大径 18.4 cm 底径 10.1 cm</p> <p>本品は、戦後間もない時期に丹鶴山南面の天理教教会正門付近から白磁四耳壺（元代・景德鎮産）などとともに出土したと伝えられる。肩を強く張り、腰は引き締めずに直線的に延びて広めの底に至る。また、口は細く引き絞り三角形に折り返した口縁をもち、胴部中央に九つの波頭をもった櫛描波文をめぐらせている。数ある瀬戸の瓶子の中でも、櫛描文様を器面全周にわたって施す作例は珍しく、瀬戸の瓶子の秀作の一つに数えあげられる。製作時期は古瀬戸中期初頭およそ14世紀の早い段階に位置づけられる。なお、出土地である丹鶴山は熊野速玉大社の東に隣接し、中世陶器の優品が出土することで知られている。</p> <p>5,500,000円</p> |  |
|---|--|---|---|

以上